



燭夜文庫

首卷

(尾巻七合冊)

中村俊定文庫
文庫 18
1029



寬政重光作壘孟取銀

金雞先生戲編

燭く夜たりけ文ぶん庫こ

瑞王書房開雕

呈上中村俊定箱兒

水谷のり

此書也之是也又金雞
氏所修也上少之語分
出棧軸既非上誌本條
所及也秋夜讀之不
覺東下之紅云尔紙

時竟改二年庚戌壯月
上漸也

四才山人

序

狂邪迺古之狂通乎匪今
之通韻事三昧滑稽之
雄克學牛門躡復伽尾
陽風此篇信滋味不與
鷄肋同

朱樂漢江

漢江

寄金鷄古子

逸物各難出上州雄飛
無敵步禽羞羽毛不
用三文芥有頂天邊
如鳳遊 平秩東作



聲一

空難色人第黃岐之術性存存之霸
不事小技自謂大丈夫苟能死安
能移死其志將以醫天下之人嘗
言文雅之癖目之為之解身而何能
及國風然之敢拘巧拙又多雜
滑習然其所以吐步而用其意而
自方豪放之見者也與世之事
剛露者亦遙遠矣然見其以通孔

至難奉色也。善者見其所以
為主難。則知其術之觀矣。與
彼類。為泥經。何而老苑於御
者。不可同年。而語也。

丙辰之秋九月

楊如荻人後



柳みれやなき腰に清紫二女の曙
染をいよこれ。薔露の鶴衣を李
まよふかの裁ぬきをを無垢と云はれ
白氏乃白ふもて面をよめては四方
れありきして唇よに心形を照して
了本於小鑑鏡に心振を垂てよ
川信ふ選よよ心絆もよるを
欲濡なれよ白をあらよの而る醉
ももかの自隨は落り風よをよる也

狂態も時勢了らなひて味を
 加茂の長竹了らなひて味を
 魚好に越へり大れや道徳乃
 母師も匡衡の内儀もくも魚好
 二番し下へり実よおつりや
 漫筆永く後代寺に付つてその
 美を重き一々空志とす

狂歌を去類

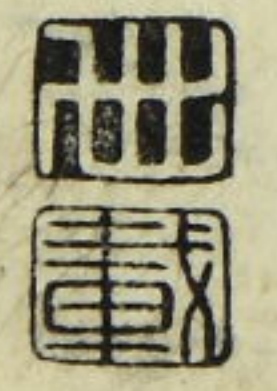
此書先以戲漫草名焉
 狂歌堂序之之時既又然

壺

機関を特會
 分一味書

山東京傳顯

愚系京山書



目錄
一 贊

老子贊

遊女贊

東方朔贊

志道軒贊

宗祇法師像贊
傾城待客畫贊
醫人竹齋畫贊

二 銘

旅硯銘

三 箴

陰囊箴

四 解

夕立解

五 序

送本多氏序

送深山奧住序

大江舊國七十壽序

百千鳥狂歌合序

詠七夕狂歌序

六 賦

百鳥賦

七 記

觀雪樓記

蝸廬記

八 傳

松茸傳

九 說

愛臍說

十 讀

讀忠義水滸傳

十一 頌

飯德頌

十二 跋

狂歌千代秋跋

十三 尾

須藤釣翁金平往來尾

十四 文

北里移文

贈山東京傳文

十五 雜文

借用證文

十六 書

與都武里光書

十七 辭

戲贈鹿津部真顏辭

春風辭

贈石川雅望辭

十八 弔文

弔陸奧白川長麻呂兒文

弔安孫子斗十文

為富永氏弔内子文

十九 祭文

祭平秩東作文

附錄 東踏紀一篇



燭夜文庫

一 贊

老子贊

道之衆妙の門番は傳へ身を廣野に牛くひとあり
其もく此者本来の東周乃藏室史其虫千も秋風
のふりくさつをとも立出く終る所をあらうがこれわら堯の時
みの勢光といひ殷は時よの彭祖といふ或る廣成老萊子
天老おとよまれし奉名は過ぎりつを僻りのふ祭
そのりく魯國に隱居よと志すふた屋乃多し人よおきり茂
むゆさせ八十一章の玄論より恬憺無為と教をつけし
鼻のちもあらしぬられ儒者れ志すまみあらし



閑人何用宣消
貝金雞先生戲
劇書

式部小路正一位宮御近所

縁水主人

宗祇法師像賛

鬚を鬪羽の下より多門とて心と青蓮の上にて空を
 詩歌連俳のそは津屋花月此もやど風雲乃向
 度うひゆりし身代あはれや

形智宗祇三文行と志根芥う甫

遊女賛

笑ゆ〜つ〜れ晝う〜て月日此駒のをそれ無〜
 泣多うれ〜夜半に〜を〜け志多ま〜れを恨む
 身成春宵此價子津ぐのり道〜路を槿葎乃華りに
 我や〜婦せんも〜に西け〜猫とあ〜んより〜苦界
 十年夢阿〜み〜多野暮あ影足袋を絲〜ふ〜や
 あ〜れ

繪文



悪童作人雨
 宣景文子



傾城待客画賛

此賛世に希くづらうしてありや
けいせいといふふらう

けいせいこのむかひ寝ぬほとをねりひつゝ免ちり寝ぬ
つらゆきしらわびくむらにありせこゝろみざん
ぢもくく海よりあふ戸よりあふぢれてぢもくくまをふ
み遠の山やこの夜明乃星れあふけいせい

葛の紫れくねるに神ぬまてふれい魚のまふたてなく

東方朔賛

俗に陸沈して金馬門に草鞋を造りしと守りし
山鯨乃山ぶるにまきうけしと長安れおぢゆき
うつ成ぬく彼も一附此者とあせしと紀文は等し
ま全盛ありたりあふる成史記の會合に淳于髡う末席
みまらうる大史公の生涯の誤ありし

籍文二

一二三人東方朔や飛を那

醫人竹齋画賛

此翁よく三寸の舌成り多笑ひを至代名外にけいせい
志也とてふ一期れけいせい自笑う筆みゆらうに体し
多難風流の芭蕉の春うよけぬむらうあま是時一杯の
出傍題く水無瀬乃清所れ筆をけいせい嗚呼扁鹊何
れ先生の志をあらう哉

志道軒賛

志道此佯狂人好々人の顯を解く僧成のくまを女を避る
蓋名や物とれ終合けいせいたり青磁乃茶碗を並右に
希代の怪器を持て如意ありは笏にありけいせい
うんがま本とふけいせい敢て道鏡をくまねを並右に

懐幸と見ふふふふふふふ

二 銘

旅硯銘

此秋名みしつふ武蔵野の月見んとおのひもてうらな人
松高子れも空よるとらやの形ふをの木の硯を飾りぬ松高
まづうら刀をさして其末を佐野源左衛門経世うらふ一行乃
楓ありとばるとん世代りくかどふ多老くまのうらうら
し後を硯ありくし硯まこれ戯まよると同んあんなの形ど
つと其まの硯の木れ浦さ火よらうらうら最明寺殿乃思
賞みまあゆらうらうらてわらと負交の盟をあせふいま
これ汝を得く東にれ具まてんそのく己汝うらうら
系り御の體をかかへんぞくうらちぎれたまども居士衣

唐子西曰硯
文壽以世計

續文三

さびあれども後笈瘦れども金鷄先生あり彼三た
みらさるぬり似れども月雪花の三の道具に子と孫と
これくま金鷄一代永く汝をすて浦とぞくま
あがりぬ自筆の硯筆にまのせてかくれま

三 箴

陰囊箴

我終つたれふ事れ多あ世りの出額極尻の女とお花と
よびお梅と名の形趁跛鼻くこれたのすも彈正と號し
靱負と稱は其中に飛とまふらとまおれまの自然書朴
名通稱ありらう後世の文盲者金玉と烏帽子着せ
しきま形られ無調法あり元来さ勢ふ光もぬく七刺繻
一片乃通用みもあらされい金と玉とれ文字あけら

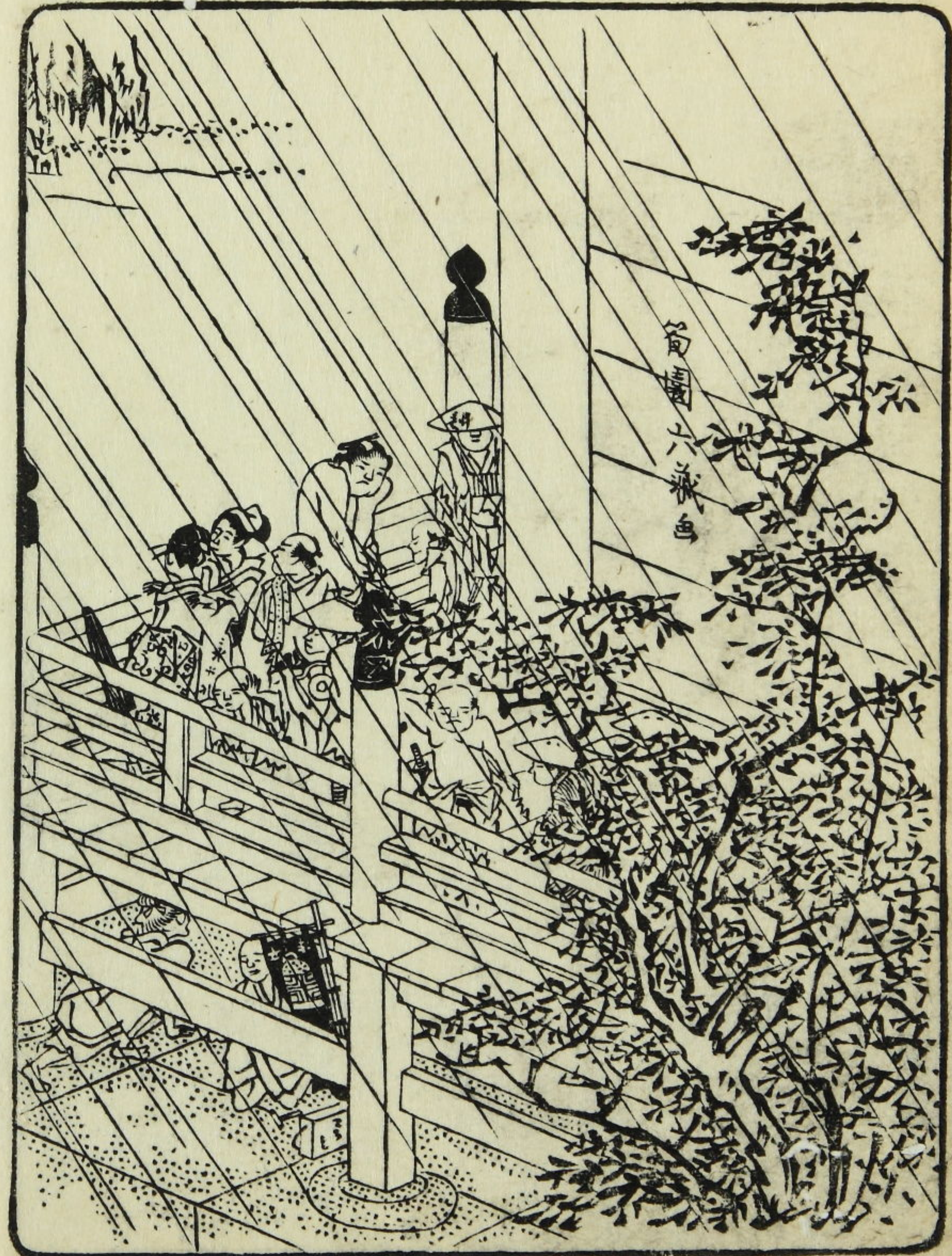
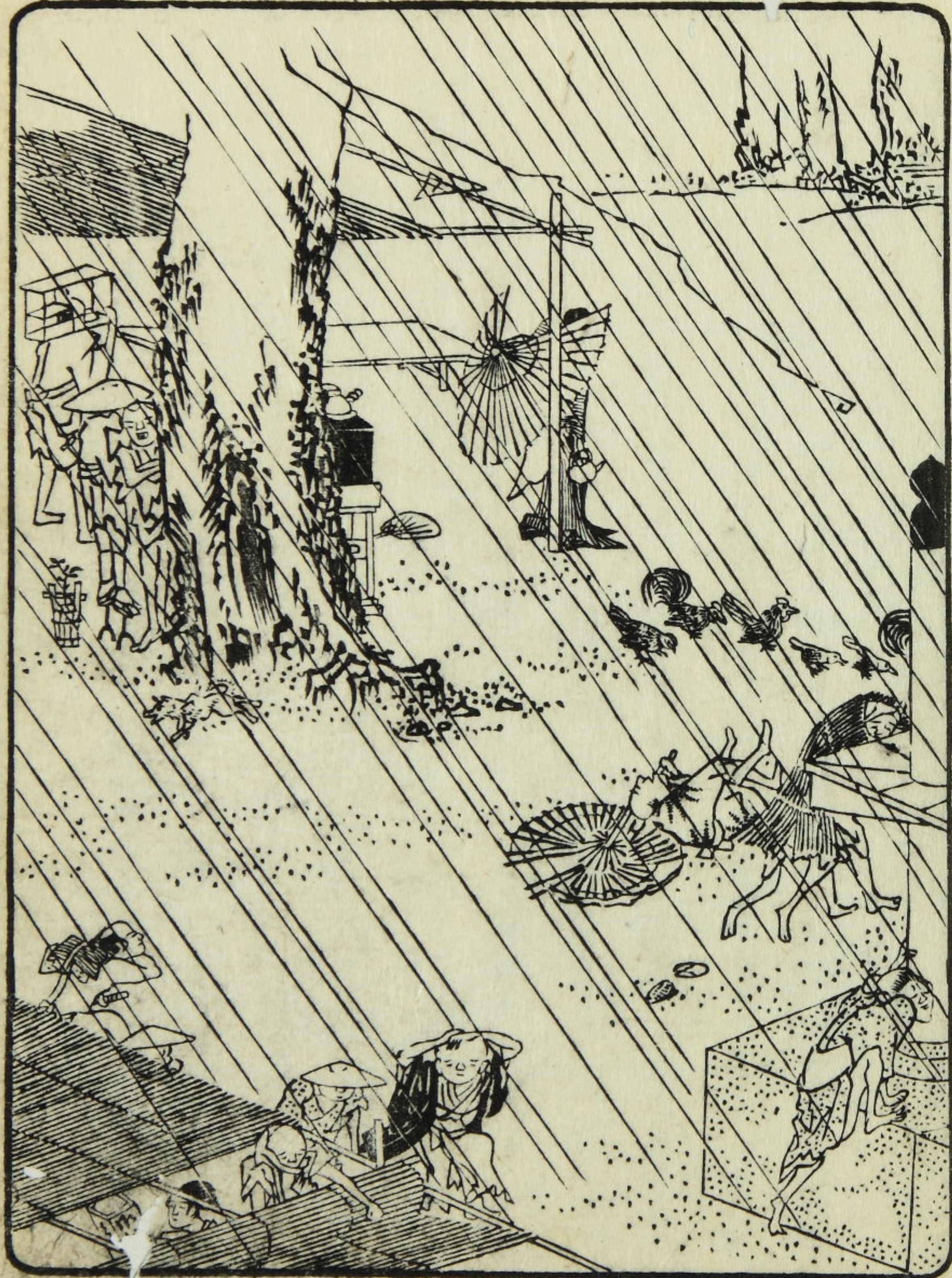
此者性静あり成をして山谷の間
み隠居以前より神国傳來天に逆絆を安置し後
を彼大師を堀抜井戸をきくくうりかか神佛の
霊場ありありこれをも信せし正をも信せし
黙して性成をいふぬぐりにて附をうし
さふとれたる老子のいふか悟懐無為かくれ
をこそいふありめ嗚呼ふたり乃徳孤なり必鄰あり
我の白水成あり長者なりとの穴くこく

四解

夕立解

三伏の天須臾みして風の勢多き夕立過る雨は足る
見漏地神を類よも痛けくも也急いどぬ

一 猿人樂屋をかきり傀儡師も歌人俳客のすまひ
残るを麦秋流しうさのこれむにねりかや侍
常ん此時ありてもか殿の勢ひ猛り鳴神の太鼓を相
飛とふと絆より絆とていふはあまのこをりて形を玉
水戸程布引の飛泉みも柱とて浦にぬをき草
蒲を其ふぐり角をむきとてかかたりし唐也てい
か折しと互身し多る松あり系朝もくの一附
身代をさりし多る於砲礮屋も何かにさたりたり
吾大路れありさ海吸帳う親父りかある勢を揚
走り小切臺のたの太軒下りきすそて五色のあ勢を
かぐは公太乃とせみねたりて吾にくか海成何は
過番を多るおかかれ出さる丸き後をうかや系侍



大道より後たえ園を扇賣ぬくはくや氣をくゞふか
うと柄杓城をくゞり枇杷葉湯茶碗をふけ出はか
ふの清僧もさうか屋をかきさつて心學者之責賣屋
に雨やどり日ご後にも似ぐ大名の依はるも高
慢は足をあふば久うこれあえうと傘は中より作をば
うけ山鳥を桶屋おぐくく我たがに平太は坂より氣を
めむ牛飼あはれいざり此車をくゞりてかきりけふも街上
一望れうちにもえふりおのふに其雨の静あるも五月雨の
ふくやうぬふも雨も同じく交雨あるよいうふれは夕う化
かどりせうくきやと是を古法乃醫生は問へいさか
り天はけく瞑眩なりやけく吉益流のたて下くも
乙忠理よりけくむといふんや附り天明三年草も

續文六

本も青くは月中の八日東都あ依草の括亭より
くゞる

夕立の雨は足をやいそとを盟成もろよ出てをく
番太島にいあくぬも町内きびくきる夕立は雨

別書
新抄

五 序

本多氏を送る序

も月され未伊香保より湯河へせ給に本多氏の大江部
うんふよりけかむけきくといさくもくくおとて送るを
茶ぬれりのや松茸を笠をかかふより多うはくも茶を
杖を曲路の旁をも多う茶門をく途申乃風雅いふ
毛ゆくふれとお糸の絡りく相生もくをく給へくは
薄れ新喬交りくたれりも信濃も名代をくは

えりぬはりらば花のやどりのたけむりもあつてよ
人子君まねにむくひ給りやとてかびの道志宿引
ありて秋野原れあるとてあつてふ

大江舊國七十壽序

古くに津の国経波志里に蓬萊の島とてまてふ
嶽ありと名を大江ふる玉とてやどりしもあつて太
月れ未高城にすえ敷一り亭を名のとよとて賀賀
つとひ侍りてとよとてふはうせとて例の狂語をうあつけ
輝系を毛く二千年に桃志葉を西王母がけりあり
むくくせ七とて世の菊れ花の彭祖が酒の口とてあ
てけくみ跡くくは竜宮のひ宮今つづとて道具座み
あり重馬門の隠宅さぶめとてあ蜘蛛のあよとて後世

浦くけは三眞靈大椿乃ぶとれこつての浅草の花を素を
あも見ぬをあもあつてむか事来ころく今此嶽を
島わるとにさけりや家れ戸を越出づくと月日れ駒
子自然とらちのり老乃山道十年志坂悠くとてあ
越とて嶽をたけりけり蓬萊れ島つとてあ
けらばたも雛子は積もこの中らびお位を預とて此
金鶏もおとも中らむ其くとてわたの賀志饅頭とて
らざらとてく

老の山名所舊政多のゆへに蓬萊れ島いきの松系

一と千尋狂歌合序

吏りちどりれ春みさえばとてり鳥志嶽にくとて
いづれ心をあぐり免耳をよ後とて免げとて并や

抄の中み五彩をぬれつ後どゆるむる香はあちあ
志さす成るが好くあけ戸あければ北川に筆成
そめ飛鳥をれあまう志花をけめど都を乃墨田志
月すうらつらど秋ををり多一巻とく鳥の歌ひ
さくくさゆ止とて形んかくげく出ぬかまね人を
くらげく青くくくはのれ色のも赤中津の金鶏
らぐらぐうけ志をれ子を見多うを玉乃夜をとれ
ありん事をそくむとつふ大鵬志持く月成かえ
とくばみろさくわのよりの松く草やとくびすか
もの南くく

詠七夕狂歌序

星の妻急とくべたふ井れよ後げ世中も

茄子白瓜のちぎりあ丸くい川も十六すげれすが
あまぐりて冷素麵をあぐ成生せはとくも彼乃
何くくわふはれどく秘んき小者成見かやうに年
一度の初戸うちられて盥の水を湯と事になれ洗濯
さるやまあまたに天帝もぶよく解とくこれと節操
貞情の道正ふく秘がひ乃志をひくすぢよ芋乃
葉の赤ほげとよはとくあれたとくはく顔冊れ
あぐれたとくさくきあきくのもどか秘よはとくさく
にかく小袖のうらみ多くはくさくあおわく詩
歌連俳のまねくくさのれくくあふくくあま
御道理さぬとくさのひあれたせれば狂言師のとく
し氣のづくに覚く多天乃川とあ十日もあつれとく

おみ梅をおせそお葉の橋乃ほくづめりどふ枝土
 圭忠車留せもやろろ形も趣向成てあくづも
 年く二星の方人よりぬりまをぬまもくも例を
 友がれをわくくひく讀出くもあくくさくこれ一巻よ
 しまれあ成天の川急まられたありのむせく玉琴れ
 緒乃あがりま世まももされあみ車のまひを踐すはく
 ほとほといふるくくま

六賦

五鳥賦

鶴の蘆をこみむは居るれ景物乃最上ありく齡を
 世濱の流くたもく徳を高砂を松よもく人毛此
 香にあくばくしていうくくのはされバ唐の子英ハ葉物と

かして瀛海をめぐると家船の朝比那ハ久紋とあして
 鎌倉ハ羽をのり画師乃日の出ハ弦ハ紀ヨリハ鶴
 朝日成脊おひもろくおくく見えてたうく葦葉山上れ
 舞雀まいつれも三角み見く東敵山下れ鶴吉々人を四の
 くにもあやむる岡を源右府の祈願所ハく鶴乃子
 餅ハ本町ハ名高ハ一豈鳥雀を説此賦ハれまをもそ
 ぎんや松もまのハ一れ雀雀の夢雲井ハ子代の敷を志
 ふハのまもといわぐくたハくもあハ小子を思ハ後半を志ハ
 夢ハ又哀れあれハく形ハくばや
 竹みせれハ嘗れハ名乃あハくたのびくときまハハ
 あより出ハくあより毛かハくあく整れハくごよりま
 あがり郭公のわけハ毛髪ハく毛ハくハのぶれハ親に



芳中寫之

四四

似ぬ子やうふべしやされど秋人をさすはらに賞義乃
 降る月雪毎の末席はまぐらふまゝにれ侍の身ぶりの
 言ふふしのべかぐらたは時を成すのそ奈版若る麦切の
 備う老したふもあしとまうはば年竟秋人も不物母
 り於古人をさすひてさすはらもあはらむは成つくあるべし連
 秋は俳諧よりあそび和ふれ出店たれば本店の提をむを
 がうもあも外れは花のさしたるしよる中や五月雨のをさ
 ちしとらかの徳大寺此驥尾をうつな多例乃秀作は
 中にまつて

木啄のつががしく穴をほけて日の暮ふとあはらげらるさ
 らりわくし普請のまつらどせしるる四十雀といふあり
 名目ありは黄昏の庭はありて物干掉れ竹筒を尋ね

旅籠のちよにもねよるべして爰に一旅を明しぬるも
家とのふりのちよてかかりぬや

燕の類も赤きも多しとてちよむ女うしていと
くさうりあるかよほど年々此者いりぬと塵一本
の土産もくしび人あつば云ふんのあふ筆に右免うも
と柳を加へ論せば尾らぶのうたねをりけ雛形と
見ゆ

公路を雪子もあへし詩人みいさせふもがうもんぬ
因中れは徳利と見えてふ俳諧師とてゆかされ
いさうれをいさふをよそたえんいよもあへしとて
かゞびさうぶ人のむらひをやりたふ先の人乃て
道よる處りたるよの似あり

浮草の徳者鶴とてをよとてやう元政をまぶれさうふ似
うらば浮草を元政とてはくと相持れ徳所あへく元政
らづられ上りたる事うとて鶴を元政の下にあへ
事あさうあへし

時勢れ勢多色の賈誼とて折しけは且木兔のちよあへ
四角山人みほえらる

桃花はくみら瓢と字うとて鶴鶴の柳と然もあへ

時れ焼鳥むらしき志れ中とて折しつら先あうかを何と
あへらうか子をのりく名代とあせしよと今とくれがむと
うぶとありてさうの賞覧せらあはをさねらの底をかして
れゆをさうとあへらあへひ形とて

至舌の草とれとあへしとてをさうとて詞あがら曹植

悪鳥論ハを殘害の鳥といふれ尹吉甫、后妻を誦ハ子と
たゆませるを此鳥をあるとと好んづとめた、の
ゆゑなり

山鳥乃尾れあぐれと至人一首のせりれ危志腫のこ
うあひ莊周が筆に殘るをま一徳とせられた一徳人乃
才を又かくれぶとれ

尾長鳥れ尾あぐりして目かのかにまめと後あり尾乃
尾をぶとくはそ所房のあはれぶとくあるに自然の通称を
るべし

鴨の味ひの衆もふ勝とく七珍の教多も唯此のを鑄一にハ
あうとくを免ゆふ又彼よの葱とくものほ身して好味ハ
す、ゆゑの種れあを沛公も韓信をゆくと利ありがとくあふまき

呼子多き名のこみあまの部ハ論せんや默志部に論せんや
極内くら承知あぐりあかみ師傅をまをるねばいさ
後の君子をま

青踏多き化りの仲間入りくら五位踏ハ百官の
列りあひふ山雀のむけりかつこにも輕業師をけは
いで逃げ鷹が縁の玉章よの飛脚屋も商賣をまはふ
雀の子を巢まよるあまのやちくハ親ハ似くかりも
かきあれ子乃まゆりともふとまきゆりやあまのまねに
似くみく

雲雀のおひあがりて鷹れ然さけつたも家鴨の
あうくらを横乃殺さけつたもいづれ世とありれむ
はうくわらぬあり

雉子の妻窓を著すやんりきこえ驚き乃雌雄中
を畜生めともひひてこも

鳩を正八幡忠はうのく先あうりいふあれば珠粒うき
の姿をのりて汝佛道うううがえりあるや家よたう
ふちんをいふ

鷓鴣を志むやうかるとそとて依猪の耳よ志のびつて
はわふ渠をちうかふ其勇怖あう

花鳥の春れあうた枝うりうはらうくはえはらうきも
のかぎをうりて掛とそこの師走れ夕べよ花うりきて返せ
之をうえぼうあうくうかしくおを話

青樓よ多うりすらん整えき成むく鳥とひ若者をよんで
豆はうりうふ其親の本村家もあうがふ所あう

鷹の壮士の氣象をたび勢と勇猛の容貌をうねあ架
うやうえふ鳥乃あうた名によらうく後の世よき成
ぬうねんもほあう

鷗の漣つたれ身や形りて夜川を篇史よ思ひをたの
ぬふら矢口の由良兵庫が毒信仰記れ雲飛りう
はうさう十倍うたふけや

雪を深物のあめにちびえれ名母うられ鳴ら矢りうたふ
うう霜ありれ美桶をとむ鳥の道哲忠鐘よ先ちふ
鶏の鍛冶町れ鋤うもをちたうれの遊廊のあめあうや
すれうとと調市れぬよにうまう

蝙蝠を胤よと出う虚空を飛あうく青藍よと出う藍よ
うも目ぶむお業あれ時珍が細目の説りう年経うれを

毛々加とのふよ一世よもくんぶら何とゆくの此毛々加のま
ありて一叙郷のふや山子もくんぶらあやいのふよの
す先つよ一其つらら蝙蝠より何く大さ大の如くと時珍
が説とある

七記

觀雪樓記

平安の紀世國のつたよ一樓をこのはて觀雪やあづけ予
に其記ありて事ありてむすめと先文字れさるべきひ
甚多し一そや王子歎く剡溪の舟日馬相如が梁園乃
賦管子が老馬塩と柳絮れ見もく我言毛を扱事つ
者香炉峯は聯句をらの本をばる火鳥羽院のつと
く此こつたの名にあふ雪のあふれつられば新

語をゆき記さるしよの事ありておわく文人ふ依
毛々加のみまのうく大あづくにやういふ事三とせあ
する此秋雁のあふるとに言傳くはると其記の事より
ねるが今ら越路の雪れやじみ志のびがむ川のそ毛
のあづけたつてをわえりてはてすれをそとぬぎ
よそをあはれもくやのれをうにあづけつらるるを
おのよえ來詩歌連俳の虚言にあをがと琴碁書画を
高懐みもあけらば屋をんずふ不經典みあり身市令
てはうえて經營のむねとつらざればあつらに樓り觀
雪の二字をかうむらせし事世よ雪々豊ゆれらふぎと
ふわれば何ぞれを官暇此樓に登りて民の竈れみぎ
つたをあたふと解其らつたをわくはる

毫してのりく其せ免れあてけりよゆるなるはつりたゞと
きてゆふあふのらう一月十日のちあぬやうのそも
とり高机上よりいひこを彼傳くがけりし越中もた
登りていつひく操航の勞をつけぬ

蝸廬記

山と山は遠くわらわら酒屋まで常以瓢のす縁び
がちあるを我々徒してこれ家と家つとあつたべ鄰ち
く味唾をふたがなれかうはうたを徒して棄れさ
ふのう野の葛れううらうち形る世のさう成のいへらよ
らあらぬど我々とまてうとれちうたあさあるはうま
しれほあがひたるみかあれがあやけの事にくつひ
ありくもつらうらと草の末葉れをどとを結びなむをばる

あふこれかれ所とふかしててふぬ所々云雲の山れを
がー高瀬てふ川の西舟して仁智れ樂と之ーかうあ
庵のうはま世乃帯にひてかしそま本れけらのいり
もれくもて車にはむ物だもなり廣さうけりけり
らすと四壁もあ風をあせだ三徑さうく草をはくあ
南よりさうこれ書あり窓を明く文机を出しをびつを
まさるそま柴を焚く調度のありあうはくせうはけりげ
ふも少ありて書のあ巻をたさむ菴の西南に居れ地を
く免千草万本をうえ多種樹蒼と名づくこれとも菊
み曲にのせ免をゆるし松り本げさう乃種をうけん神
に理屈の塵埃をうりせ竹をうけ世のあてとあせば
くも一日もあてかあつたうらうら一椀二本大い十圍

あまのつや家曾祖父のうらねみして年ハ五十年にこ
ぬときう前母の生う梅をうえそ黄昏の月ハ鯨鯨を
汁をたのひ後り桃青が芭蕉を植く淫濛の雨ハ石の
赤良茶を味ふ友とよふもの常にあつと菅溪乃道士
丹青をきは免西郊の閑人臨池みぬたの盃を把ち
招隠乃詩を誦し琴瑟の音いさ滄浪の章をうぬ
幽栖興志とくこふかくはきましくうはすあ形
影とけら雲とともに出く鳥やともり帰ふ赤を
あそ曾あををつれば舟揺るそを軽くわづと西の
かま麻岡りの海とを風飄々やそを衣を帯く泉石を
膏と烟霞乃疾悠然とて古人のはりつををらぐふ
こらう上園世臣のあがり生終る録を世くにせれば

蕨をよふあうれひふくはる金馬門の長屋住居とも
あうぞうして雪隠のこれくはれともか録バキクキ
やぐあれた録隠先生この南とつてあやなてねあゆれを
花と月事うばかたはるそく蝸廬乃記とあしそ
づれをや

山里よまむたのこらうたともあぬはらり松風

八傳

松茸傳

世ハ松茸といえふものありて其うらちいつあるもれよ
似たりらん女とく魚乃笑を帯くあはれと小鳥を木
兔を見らに我と山埜の園稻あ山ハ出ふもれを
上とほぬとくあうそはがとてかあはのあはるハ

越前の名産ありとある本草家のきく伝りき

草や弓削あまのり此男も奈

九 説

愛臍説

持統御らちりめ也有翁のそまにありつらうが後
なとせんの一句をかうめとぬまバ風雅と縁ありあり
もつあべのうだ既よまれば説の翁の名文につらぬまど予
中列ふれを毛ほり此説あり持もく人の支體の中
眼ハ見ること此奢を生ト耳ハ聴事也奢を生トはら
わぢつひの奢取生ト鼻毛かぶと此奢を生ト手足
毛のやうとこれら此屋川とありてともうゆが人の
ありづる先聖をぞに沙汰した人今見よ眉ハ

ほそれをうらび齒と志うけをいとせぬれどかく乃
おときを聖人のうてうらびの奢あるととつかに
此と鼻毛のごとくのびとまこれをもとぬつれ諸子
凡の長赤の世をうれ鼻毛のあがれとあわらみほり
つらぬも一生はも天窓にあづらぬもの世あり
ありて我毛をふ所の脚や元来無藝せ能みし
耳目のほりきいあづられと古今御を以て固家
をうらぬた名いぬまつたされ賢者の心を臍の下
みねちはあまかつにもらづらぬ心を出さば又此
ものにくらう老く眼鏡のせまふ若かりて美婦これ
うづりも形く常に足袋取中此厄女もあま今も脚帯は
てふものも仕出さぬ古今つらぬんあまの豈去の御子

あらびくむやうとて官踏青雲の人ちさるるは
我徳逸の于城とせんは多劫をうたれ武夫よるも一
候もつた本尊と有るべし予はくはあわて愛
をくりふ

いざしはは辨はあらん冬こり紫

十 讀

續忠義水滸傳

世皆宋江明よく士を得ふと稱ふはくはあらんや
呉用が智よく免ふ柴進が財母と免ふは呉用の山師也
柴進を通るりの外は呉用の山師とてさる事なく
柴進は食客を絶つてはあつたおろく山師とあづけ
通るものといふんもむと申すや

公孫勝が道術母れたるは一多び吟をれは雲をねまし一
ふび嘯けは風を生じ予をれをばく龍つひは虎つひ
とあづく蓋狐はくはあつたはくは乃格形り必しも
蛇つひの輩とあやまればなれ
林沖女房れはあつた鞍がえさやと九紋竜盜賊の
ふ免は帳めさるる見ふに齒づゆく讀はほお
か
李逵が急性母して出傍題ある大言をばかちつるも
宋江明はさきりと天窓をさるれ呉用がさるる
あ免はくは手もねく閉口くはあつた直しして
可也
没羽箭が石を飛ばし此術古今にあつて

奇事

盧俊義を免大金持ありあつたを兵用はせりさ
此産を破つて梁山より下ふたれりいれりかき息
子と母をそばとすものとなし多りつて
呼延灼の火術よき玉屋も筒をけり大金大堅の彫
刻より高芙蓉も刀を投ぐ
神行戴宗は一日に八百里のれき熊谷三兵衛
みもつえつて
花和尚の杖の芝居の無慶をとおし武行者の
勇力を其の和服内を欺く
扈三娘孫二娘がたつた男の中れきあつて勇
巴板額の上に出る

己未秋日
澤一雉道人畫
于松風書屋



水軍頭領李俊張橫張順とともによくたよぐ又阮小二
とともふあて阮小五とともふりかむる兄弟三人母一母
ごちやう凌草川よりすねとらとせし濱成友成武成とも
似たりし五神孫五神友六が事とたれしいげふ
まぢ
時遷に勝をおりふりかあしに黒猪東より出るとは
津くくれきんけいけいね形首尾ハシイ考のつ高い
乃て唐人志士とて業しりもやれをせらるるあり
るきこ

古は伊香保湯ありせしは後講師馬谷
このとれ人乃りけいけいおけふ全本し
少く何かしもて事と事又せらるるあり

アツクわりの後たれいこのをかり一二の義士
を評して鼻帝乃けいけいけいおけふ者扶つ
らよふらこぬ

士頌

飯徳頌

凡天子より下諸人よりさまで一口もあらんがらうの
らざれもの免しと孝経ありむいし韓信を漂母の
みぎとやしに飢を志のれ最明寺殿ハ佐野の粟や
しにさむは成あせし顔回がたしあき麓食中れ
名ありものしし後人美食を制さられ一語と陳遺
の鑊底はさしおけら親孝りの列りあがら
孟嘗の黒羊飯ハ食者のおけらふくをもへこす

あつとやもく〜や〜とらひ侍膳とつひ〜うりやん
でおまん海とつふそも〜一號分身〜多まつに
いさ〜差別とあ〜ねど吾 朝あ〜い免〜り
至千乃苗字をい〜え〜とを福をまつりふよ
小豆飯をい〜り〜大黒飯まつりふ〜豆のや〜とを
てあ〜と免〜りの祝儀の定食〜と甘菜飯と花見
其定食多〜と其お上戸と割〜とを尊と下戸を
茶免〜とよ〜るふ赤いさ〜り飯の品をい〜るん〜
彼愛蓮子とよ〜か〜りぬ〜と甘菜免〜りの眞の眞
あ〜免〜の茶免〜と茶免〜〜とに隠逸〜りのみ〜と
わり飯とよ〜ば〜れ君子ありもれ〜とあ〜と文子
〜り〜ば雉子飯とらん〜る〜の〜と強飯の勇

あ〜と〜免〜とあ〜け〜論〜ふ〜り〜あ
近來推茸于瓢を加え〜と松菜飯と名ば者
〜り貴忠豆腐を〜りてこれを免〜と〜とつ免
〜と免〜と松魚〜と〜と免〜と葱飯玉子免〜
鯛飯栗免〜とつ〜芋〜とこれ〜の仕出〜と新
飯〜と〜の〜一家忠美味を備ふ〜と劉伯
倫と酒徳の頌をい〜て免〜の油汰とた〜と
〜と依怙具負と〜と飯〜と酒〜と
劉子ハ〜と〜とび〜と〜と
一言飯徳の頌をい〜て劉家の酒徳よ〜と
〜と上菜の才と〜と〜と

あまの乃ち中々くさるるを秘づる茶室ゆつるに見ゆ
かゝるるのこゝ

十三 跋

狂歌千代秋跋 一ノ菊花集と云

の依あつにゆめを龍山のよと合々両国の狂歌會より
およぼまざる彭祖の盃の酒中花りゆめを沙草に
柳屋よりあゝるるべとらんぞ見識のまゝつたよ登
つるく洞明が菊より兩障子なきを見せごとく満るる
楚国の忘れものぶ英をうゝひくまゝひかゝるるもに
俳諧師忠さひり飛くやつゝひく例乃なまら
うゝひつ茶菓忠忠あつ後れはとくもよゝいひ
まの狂作あれば此一帖をかゝるる家くかあ

あ災あふくうゝと狂父金鶏菘の隠家より茶室
九月九日

十三 尾

須茂釣翁金平往来尾

此往来の須茂何のこゝれ遺稿みくそよく虚をりつて
實事よ傳ふ秘りつと我郷の童子これを竹馬
みのりこゝえく燈の車をワ敷あつたを中りよ太鼓
りゆかそれぞんあれ赤松子太神樂の湯初穂海
巻末よりむね事志

門人岡野世寛著徳舟子
よみこころかたき

ふたりのけふんと終

本半

久多可戲文庫

續編

十四文

北里移文

友人毎名子あはれものさだり十七八の年
世を浅草を小恋乃山子さけ侍を
依父坊主の異見母應しそかゆね十露
盤の世に出理屋の塵にまどりしを
二十日れ春秋を磨く又もむくれ放蕩に
うしろめさひ此山子隠れん事をけり
戀の山に靈黒助稲荷煙りを大堤八丁子けせ移を大
門子志ふしそ日汝をく免此山子入りと死の鬼

侍ふにれおよめたよこらゆり心無何有の郷よこ
毛ひ後く洒落をのそつをふ事江の島を具
づりよるも多くうい本を見ること岐岨の林よこも
志げく紀文を野暮とく梳久成純くくはさうよれ
おく伊た劇つもきふくくとけらうられ取ふもゆりれ
色の鉢巻をとる實よ公子も神とする事能守大人も未社
とすかことおよふがごごりりてうてい天晴乃大
文火稀代の通徳く角とれりひの外よ金れあふ本
の枯るを見借紗乃山れ崩るをれそれ儉約俗情
忠世よやうくくいりてを全盛つた事夜のさう
うくみ通人さうく暁の駕むふく實よ三味線
のげちうらる太鼓のぞんはく野郎はく乃がをる

千枚張とん油の事をよあふくく向よ我山の眷
属汝の多免よ二世をちきと油くくあにられつうられ
それもれ不とんやきくおくくは油の多あよ指を切
たるおつん油りさるをされ多る藝者油よ初植を
とくくはふ彩造油くく免くく福ひれめしうる虎油
のた免に草履をつくくくく葉産油をのせくく指
牙汝をてくく多れ挑灯油をかくくたるあくくごさ
汝く碎をまきけくく袖の梅油くく免よあくくね
とくくは三味線かくれくく免乃輩摺のくく油
見さうてくくは多る憤を今におおくをれあ油はやく
半途みくくかえまをくく此山くく入くくは川せハヤ
里手くく口をり月あねはくくせ料理番れを以く



耳をきくせ女師の扱子中はあそ坊主みせんもあれり
あそや帰とくはさふさひ来るこころの秋

贈山東京傳文

大元金石の聲あるもうこのれハ鳴るはま先人此才
あふも用ひははは鳴るさうさうは月ひきて鳴るも乃ち
小腹は疵争の鳴や肛門は屁の鳴と土衝して耳忠
鳴ふりそ其餘琴三味線太鼓はくも笛胡弓尺八の
ハの物らめのよく鳴れはみして天の附も又かくれ
ささく鶯笛乃春よ鳴ると神鳴れ夏に鳴り持衣の秋
み鳴る袴多しはの冬に鳴れ皆四附の鳴物あり其人
ハおけふもはるるあつたハ一二を何者てつとん
四角あか人をさほくくさくざれとれともくうよ於て

平安の朋孫狂詩をりつて鳴る尾陽の也有俳文を以て
鳴る東都を扱れつて自墮落先生り杞まると其おとら
えつるとれはあつて三味線のて天満さみ風来子をも
つてつれ捧起とあせり其のうち四角山人一附鳴物乃
座ぐらやありして門人五六輩はる狂歌を以て
鳴れその世戲作者をその鳴るそのを喜三三萬
象全交春町がともがうこそりよく形勢今や山
東子のせりり鳴る實はあそその一まゝ音をんに
して自笑がよは出於事あんぬまあり二千文
鳴呼それ鳴りのねやあはれ一ハ那ぢふと
瀧のああ歌をうたは乃いけきんぎふとふとふと
なり多りあつたらう門をると頓首再拜

借用證文

一我多事口入も亦く證人毛多れまばくしてたし
母の命ひを何をらぶらうしと紫詩歌連俳
志むしゆ子懐中まを此筆をうねけけく月雪
花をこつたは母しを極上く吉れうかれ毛のやま
ありあししとされどたに飛と何ぞのく多事れ
かたれば門人も亦く候才毛形く閑居と貧家と
しゆくく慢き候子多しむらかの富貴を天よ
らうときげばあうく手れさくやう候子に何れ
とほとらうくわればほうひあまを法かをも手
三又人乃その証の筆免されをらうは我と何

ふくれふ覚も亦く元来は睡落の花をこつた
絲ば身に水炭のみし紙をもも守五侯の門前
鼻唄く通じば二軒茶屋の妾も今はうや戸は
而後み出さされば道途しゆあまを門さむ隠去
みもあしげ世人にも何しゆもし張仲景我孫を
しゆば半表す裏れ男とふ屋し我もく閑居
しゆもれしやものこりあり胡寝と彈琴と机に
しゆとれり貧家みしゆたのむもれこり二季
し十露盤の理を論せが紙と煤掃虫干に手紙
勢せざかや出入よ衣を何した免げらる形り此二口
メ家しむ川の多れしとわれば孟子の全蓋よる
一割まかりしゆてきしゆにかりれ命あう千

年歴ふとて返汝仕まじくも借用語文仍くん
のたとい

十六書

興都武里光書

不佞コトシテ東都ニ遊學セシコト後足下を牛門
先生を巴人亭に見顔交遊舊相識此亦ヤシト
ツエトモ多クはふり光先生ありをりて後ニ補す
るコト後をシテ別來五年遅々として一字を報
せざれは是ぶコトの故也コトナリテ宇和空成事
多州堂ニ信宿寄空茶コトに欣々多ク大通コト
竟日京都乃風流青樓および戲場雙角の珍
説をかた不佞山坊ニあるコトコトヤ

其のたもてに五手をりて通家すべくコト
あり事をあがりばコトをのガ黙々として野暮と
形りて誠意をたれよと夷曲乃後みおよぶコト
まげ足下の事をうたふし東作美顔飯蓋金埒
たのしく當時ニ冠多りコトコト鄴中の八斗も文を
袖みしそのに嘉隆の七子も詩を帯と後みして
さるるコトあはれまは足下此秀逸あるコト聞くと
酒屋ニ三里豆腐や二里れおとれみいさるて神
乎鬼乎れをふべし空寂すてり歸鞍はよ
くいさる下情をコト後足下高名かれ形コト
コトもはれ光先生ありをりて書驛使コト
コト希き足下俗ニ補すコトコトの姓名も

東都つゞとれちきるあね事を志免くしむるえ凝
寒とんをくをねるさく歌乃く先を命とれたれ自玉
せよ自珠努よ

十七 辭

戲贈鹿津部真顔辭

鹿津部のぬく東都よ家居くせればとるをあ成
さけ武藏塾乃若津部みして猿丸大夫忠けけら
つるをく奥山の麻りいあくとりとよと操觚の
雅人あまはあ暮よ料帝を友とけりあうくさうろ
あくわかえいこの麻津部を怖あべりあ又麻の
名よおろ葉山乃照射のかああべりも機燈籠
の光よりハたのいも引りく中の町れ機燈籠

しよとを山ものれつんくくを踏つてせふ駒
下駄此音はまよき笛とあくねとまきくく心
よふくもあくく

河東春風辭

春日曾我公とれあくく船を墨あふり
う之舟中ありて飲燕夢囊中きり免て
まし公歡まれ事甚し不佞金鷄春風
のこころを作つてく

春風起つて黄鸝飛桃李花開つて奉公人園子
れりむく納屋よひさる比目魚あつ茶屋よかんを
しん田樂あを割合勘定けりあうくく藝者を
つれて家根あねをうかむうふくはくく



康申首夏
麗堂山人寫



紙巻を揚く長うさ先りや身掉れうさ振らげふ
あられうかうじて懐才ころうさ葛西太師
鯉をいづかぬ

三囲の心くまわううらきても秋葉はまはぬまの日

贈石川雅望辞

石川ぬし 去年の秋よをうたふも昔あそびて鳴子ふ
む戸中ぐれころとすまひーたまあけふよりよのぬ
ままび乃あけられりりのあそびぬさそおほ
ら先とあそびもさしーふみそをーはくしぬぬおのれ
あうぬをさちうさ成かさぶかまーりれいさ
うたもはうあふ乃いと戸形ぬれの手とてをのれ
う中ぐよあふ足とてをのれうめさそあふりーい

寛政三年十月十八日
石川雅望の
公家外は
江戸に
放されたり

ざれがまてやうさつづり契潤の情よまじだぬか
あふさいーはなれ世乃ありあつたこと身のげごよ
あさびろくさつをあやまに事むーに今より
あけてもつあふうささつた去年ぬんわごさ
かうにああさつたやのめれ除生のはげ免山東ぬ
のことにおおあふさーいさ門まらまらと頭あは雲れ
ほささぎにやさそそり誓のほとまえうせけんさぬ
ようさちよあそこのまもさささつたあせしもさ
まにさうてはさもらーれさるにおふが秋のこせ
あよーみわさうてあつた後もむーれ誓のあ
もろーうちもねささびたかりかうさあさうか
のおさ

あらぬのと頼めし人も世はあらく面ぶらぬる斗し

中川がれもよとせあまのこさたいたうり失意しをんこ
ぬふら後人うり赤川うひてあれた形く世り人に
はうとあれた事をとりあれたあは今うりしをり
あれた中川がれみして屋はづれをあらしものうり
るべしむりし人つるあれたやとり魚りうりづれを
魚乃らう後をうりらづとあややせみやあれたうり
らびべきにあらぬどれたあはとあらぬとあらぬ
中川うひつるあはとあらぬとあらぬとあらぬとあらぬ
つあぬの

寛政四年九月十七日

十八 弔文

弔陸奥白川長磨兒文

屋川がれいまぞ長麻呂ぬしを見ばとらぬぞも其名を
あれたとすぞに飛ぶしとらぬぞも其名を
のりせよと雁れはをらぬしとらぬぞも其名を
一帖をれうりぬこれをとらぬしとらぬぞも其名を
あれたとすぞに飛ぶしとらぬぞも其名を
あはとあらぬとあらぬとあらぬとあらぬとあらぬ
の取長も掉をとらぬしとらぬぞも其名を
角兵衛獅子も掉をとらぬしとらぬぞも其名を
あはとあらぬとあらぬとあらぬとあらぬとあらぬ
あはとあらぬとあらぬとあらぬとあらぬとあらぬ
ふしとあらぬとあらぬとあらぬとあらぬとあらぬ
地上よとあらぬとあらぬとあらぬとあらぬとあらぬ

清々み赤珠碼礎をきつらどちぢた〜庭のほごを
手みむ〜と六環乃金錫をか〜と形〜乳
もれよびあふ耳露を味飯〜屋〜ありけんこ
をう〜びひた〜かげろふ乃夕をすち夏の蟬乃
本秋を〜とぎれも〜れ〜れ〜み〜と
あはれ〜とんともさか〜か〜君やれ是
をね〜と〜

平安孫子斗十文

何苑子ぬ〜の世よあふや酒をた〜と俳諧をよ
〜と〜吸露菴〜一斗を〜とふ者醉中佳
句十章哉吟せ〜と人よん〜斗十文と稱す
其人やち〜と毒〜と形〜ね〜薬もあ〜と

唐辛子母か〜とのあれと此男〜と得たあ〜と
つる〜げんのほん〜とぬきて一服多〜と人なり〜と
〜と〜^{寛政三年}辛亥の春腰〜とひさ〜とあば〜とぶ
ら〜と〜と山崎めわけ〜と酒のふ〜と死あ
と〜と其生涯の手〜とお〜と菴の通
和尚もた〜と〜と是が〜と一悟を
は〜と〜とた〜とふ

酒とのと首つ引せ〜命調きれて〜と笑止さ

為富永氏甲内子文

ちやく〜とあれ富永富春ぬ〜のうち子卯月
もあ〜とふ過ぬふ〜と根よかえは〜とたんの花
ち〜と〜とれ里〜とむき〜とひぬ病〜と

日争むも富永の家にすゝせておぼよそ人の及
も坊ぬき近のくまゝ名をたてたがんさ形どむの
くたにられとせさせ給ひしもまぐせのあよせんす
層ねくあうなりたまふと家よりさ川きす竹の
子のたわれを見よはは赤貝此む戸子あながたをき
山附あわちのえりたうともいうぞう此たがたをつくさ
や洞もわくくも思ひやられぬうねあかなうい文
あしはつゝおぼくもたれおにるせん十むらもあぐ其
けをらあのみ

卯のち非れう赤世や人もちり屋すね

上九 祭文

祭平秩東作文

不佞少年のころ江城に遊學しし業を牛門の巴人
先生より受く東作子と名をたて先生より授け給ふ
一日講説のむしけみし東作子予をうらうんて
いもく足下の郷上毛に三山あり一を白雲といひ一を
金洞といひ一を金鷄といふあつたはふあや金洞を
人れよきしけ所みし金鷄の一山も世人あれを
あしげ足下あやう金鷄をりし号しと名を
あつたは則足下れ學業大成の日にあつたは
金鷄山まじり白雲金洞と肩をあうあやん
けりしけをうらうちり人きあど狂どたれが先生
もまじりと笑ひ給ひしとら社友らあは是より同
て給ふ予をうらう金鷄と名をたつたはより海今

十年学業まこととてまじく故ありて身をたつれりや
よほまらかせしより巴調の紫経典のわけを奪ひ揚名顯
親夢の一六と愛して螢雪の窓下は女大夫の静の流る
事なく翰墨の林よと志月や料理乃肉盡ふこや
なやとてさばらに流俗の滑稽者流とよづの
何をめりて白雲金洞は看をあふんらぬや依樂
の月利多むひともつていさく寛政三年辛亥乃
春東作子三回思よはるていさく其免を奈らん
がやめに舊遊交情の能をのぞくたれを寸志れ奈
文みらりては志於事あふ感くうけりよとふ

門人 寝語軒美隣校

まじくけあんと 孫編 終

附録

東路の日記

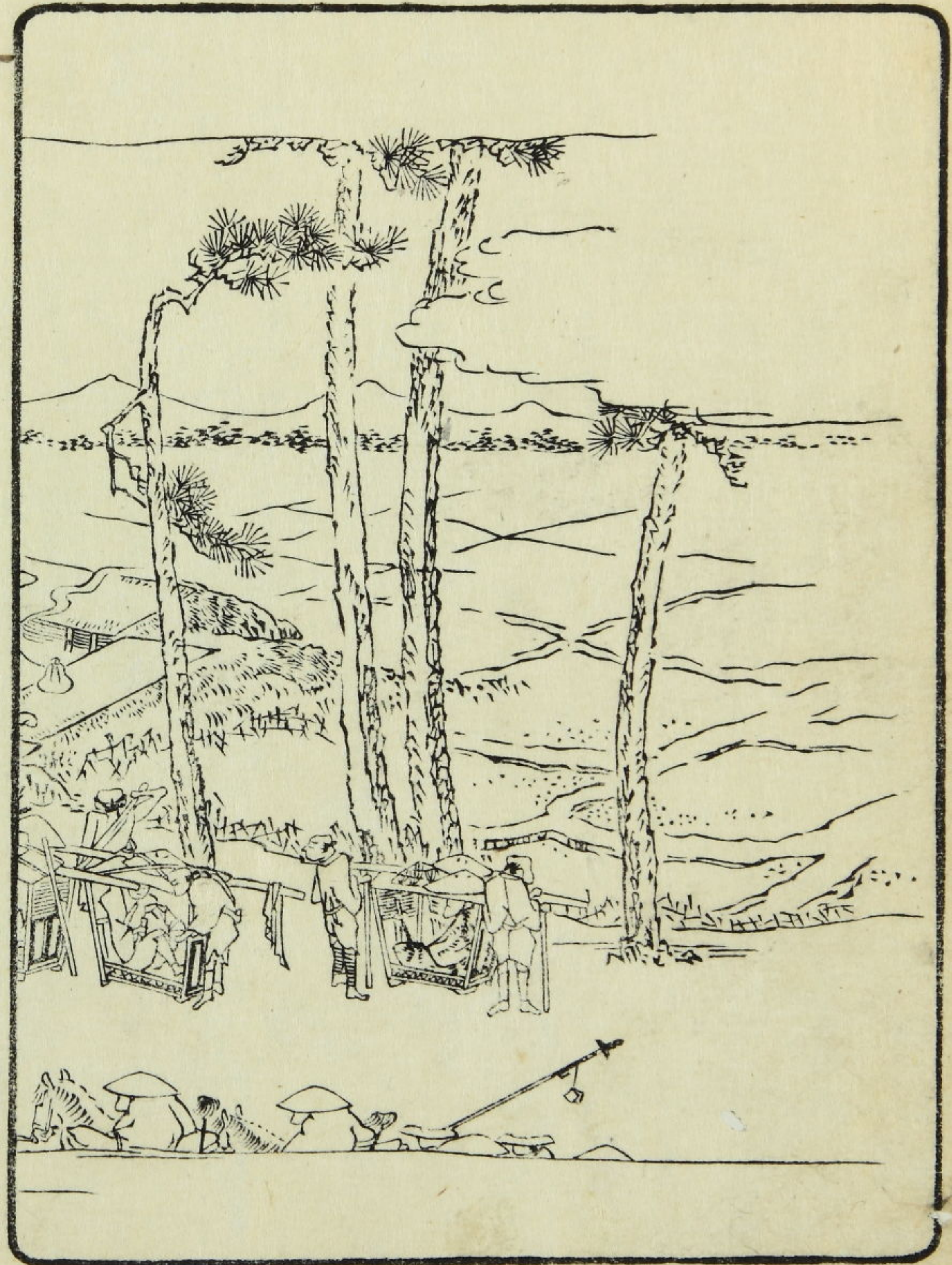
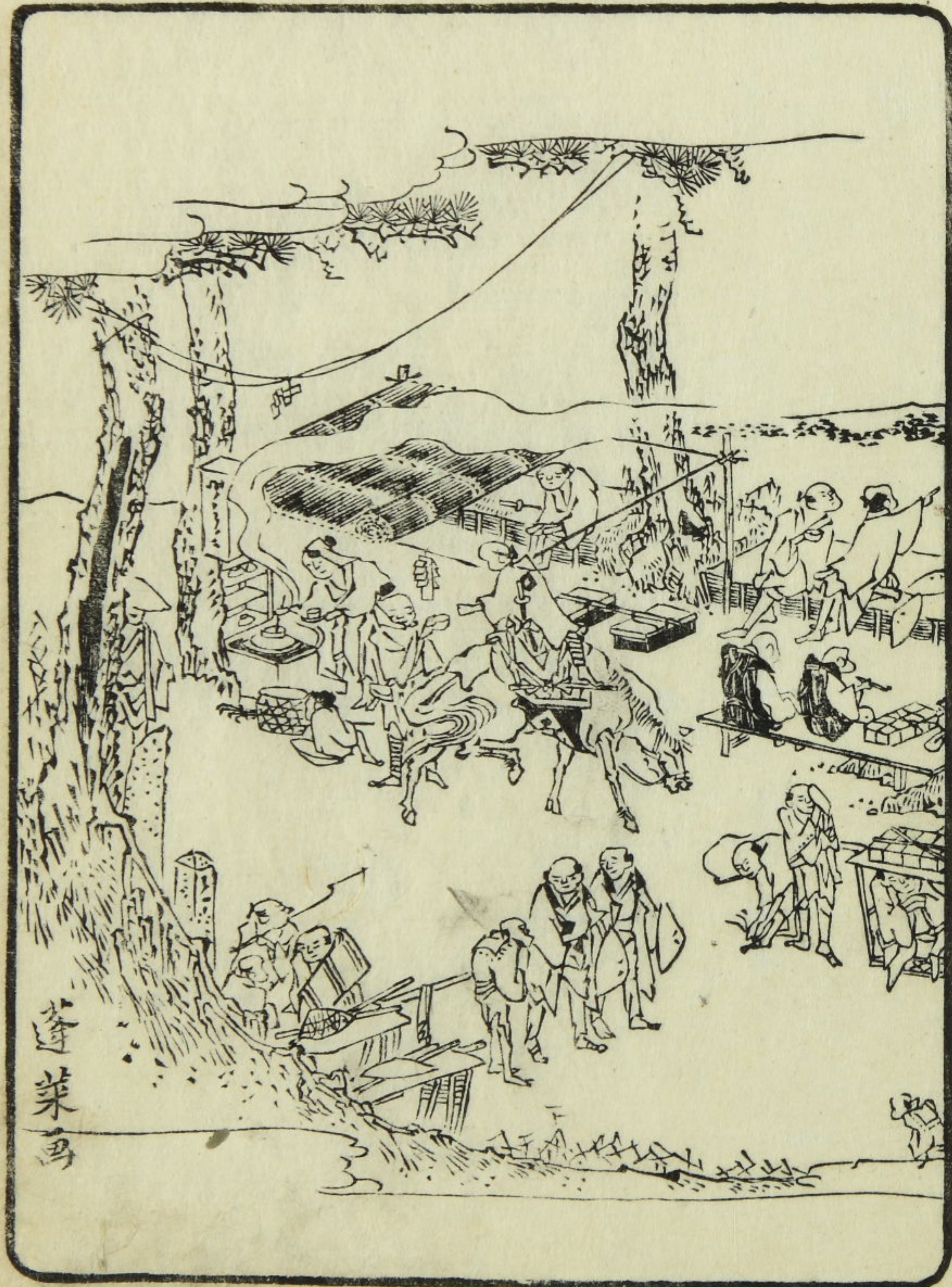
三月赤未の六日上毛此草菴を出る武藏野の
旅りむふ巴の刻菴岡より神奈川といえ
ふらる川風もそそげぬがくそ秋も只けあ
上より立効れよとてけり

鳳の子別まけしやん奈川かんたふと流をわけぬ

それと道ワれて本庄のむ戸ややりの家
はましくあくしてあうく都會の場取ちて
たつに不可測といふ道人ありゆつとあつた
は旅旅の風雅も此所をけり

驛市のさゆをふふは換子ほらこれ髪結所を醫者
の家と見えたるやこれ白壁づらうき本陣の何房は
雲を志のぐみも似たりはさき屋は定紋とあるの
壁は左官の手を流く大名の扉は正面乃
鴨居より三度月糸は着れ板よりゆる軒
丹下げ家名えよらんぞうにあふは三間四間を
座浦あけをねしきくくくくくくくくくく
ふらより内よりつらつらつらつらつらつら
あふらつらつらつらつらつらつらつらつら
丹のわんもん店は此戸板よりとまりとや此看板は
達摩はつらつらつらつらつらつらつらつら
粉志大いさ三本は障子より一まの形はつらつら

其赤より先く切客を眼をれどつらつらつらつら
多くうらやまめやこれものをれくその切ふ味たつら
靴一まの目ごちたつらつらつらつらつらつら
あらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
わんごつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
遊女もつらつらつらつらつらつらつらつらつら
哥いよむやよほつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
足を休せ饅頭ありと細く江戸一やあふせ紫
とらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつら



石よりともかきく味喰いかきや乃白ひし我とく
ももにらく婦人くくは夫よりくくは夫より
堀田村をくく小山川をくく固むく誠をくく
宿より入る長き車税町をくくちちちをくくつた
およぶくくは名よれふ六弥太忠純乃墓ありと
あり

夏州やこの古塚を走らうと魚

折くくは暑きむはくく行る水の流るに
飛くくは礼記の教も南むのりくく是て大を
ぬれぬむくくゆけは松陰よ公太をくくあり
よるは是をくく魚は河朔の飲をもくくやま
おろくは芝原よ一睡せむくつれくく六季
附三

うちけくは多系粉一帯くまひつけゆくに暑き
やまよくは乃もくくはくくは宿根村
舟よれは腰いもふぬりぬれどなれくく婦人きもの
あま^{酒屋の}障子に二六ありきんとうはくくは
形くはよるくもらんちんあひさふき清免
おろくはと地はくくはくくはくくは赤
張成盆子ゆりく軒下よ出くおきおあり
はこれあくくを志のくくはとあんだら
きくくあくくはんにくくはぬ六季系十ぼん
はりくくは脊戸よくくはかりやをくくはぬれ
夜鷹鳥小家くくはくくはくくはくくは引

師といふ多岐ありゑあらしぬうほりちかけざしやれを
鼻より紙あしくあやうぶ成はしき高くもすすれ紙
戸よりあげはるるからりなりそほつてぬされど
毛柱より千子振お月八日れ短冊そつ戸にまり
多岐いげとまかたひりやとたぢくといとあ
かしそれよとゆくことゑをうくありく源谷を
むまやりのつとあつてもあうくはましくしれ家
飛りこちにつくく多本陳のほくとも飛るかくせバ
推の業よりぬ不自由きあうぶくうべ町をせ
まが並木の松づら夕うせりあふがてく露だん
も目録をりうくぬば事と出せしほあまうしんき
もすすれ多庚申塚の申れ刻雲がつかかど原

の立場よいられ玉の井てふ茶店あり縣よあどの
られと銘をうし鼻觀香蠟をのちりひ實は芳茗
とつあぶし長安道中よ是をたうが陸羽も中節も
必すうく立しあぶく学んやあうぶきあ髪のを解り
しそ一向の俗物とそくむ村を寄合相談よと名
ぬし教よも肩をあうぬく定て居士大姉の家が
うああぶし一壁よまほれ乃短冊をまかたひま乃
口まはししそ一も是りやんくきりのなりしうれり
尻焼猿人狂茶を海賞美のあまう一首れ狂言をあ
うしそてまけし神相の箱より出してんせりま
まうく面なくそく傳りぬまう二丁あうぢがあ中れ垣は
夕貞のあうくまうく夫立の筆まうて

夕静の蓋を引のぞきて瓢とちりてをのぞく

はうれし足あみあはしつゝ石つゝ村の石よつ月ほさ
ちたそれほほれに無谷のむすやどにのぼる花
りこれ多れ出女いとわびにたぢうすしゆりてあや
庭り出はと飛と〜〜若よむつらりたよむ川をう
手玉れど〜〜にうゆん〜〜つれ〜〜と家よ地さ
つれさる屋の〜茶多葉粉盆おど出はをんたよ
火入の火とちりきえ〜〜ちび〜〜仄吹の大つら
一尺あきとれ竹す〜〜てあは〜〜うげあ〜〜ははに
う〜〜てき〜〜あ〜茶のあ〜〜はた〜茶碗よ何
づ〜屋と家名いうめ〜〜やだつ〜多れた〜〜ま
よと岳風はよつらぬれば是の〜旅の全蓋めだる茶

人よぬ手拍子たま〜〜にきらえぬれども屋ん
の〜うけ〜ひ〜ゆ〜と〜生〜たりあ〜ら〜くあり〜茶よ井
細工の膳あよに〜〜のき我と僕とに〜〜た〜〜り茶を
〜れがあ〜あ〜れてむ〜〜飯のあ〜の赤茶れあけよう
〜れ〜は〜く〜け〜ら〜ら〜ら〜にす〜み〜茶れ〜
平の茄子よ〜〜のち〜ら〜げ〜ご〜う〜あり〜焼物四〜
あ〜〜れ〜あ〜〜う〜た〜た〜酒〜〜ら〜〜ら〜れ〜
され〜も〜飢をあ〜の〜すやあ〜あ〜き〜と〜二三杯〜ち〜ひ
けり灯よむ〜ひ〜揚枝ほ〜りひぬれ〜按摩〜ん〜へ〜
不き〜あ〜は〜よ〜あ〜あ〜療治を〜〜む眼を
牡蛎のむき〜れ〜ご〜〜月代二三寸を〜〜む〜〜
〜れ〜と〜め〜〜治を〜〜折〜〜る附馬の鈴小揚の

唄きさうにきこえさびしき幽谷ちの鐘三更を
つぐれは浦のきこく夜のもれうちけかろぐ風の音を
そりてえてあがろく旅度の夢をむまづんとすれそ
尤の産まに軒のぶれつくらま右まはし浦まなりこれ
旅人とあ女そりありあそびをひそくふすそりけし
多れそりかして一睡まそりくちよおげく多れぬ
みれどはまをなぬ目をまをまそりけしけし馬乃
いあまたおどはれそり例の八ま豆腐のあそ
くそりけしそりこりこりまそりけしけしけし
一二下りきり富嶽源道三浦青溪雪江道
人あそりそり隠者のあそりれど早まそり早まそり
多ればそりそりあそりそりあそり山こりけしそり

とゆく修無谷のほそにけしけしけしけしあそ
追まそりあそりあそりそり夜ま必まそりあそり
眺望の他まあそり山あそり田あそり村あそりりてさ
社佛閣のそりけしそりあそりそりあそりあそり
むそりそりそり移の根つそりあそりけしけしあそり
光りそりあそりむそりあそり

芙蓉秀出、綵雲端、堤上、風光、留馬、看
因、想、中、郎、回、首、處、千、秋、白、雪、入、歌、寒

六を、あそり
且形そりあそりあそり富士山あそり月あそり雪
文字のあそりあそりあそりあそりあそりあそりあそり
いそりあそりあそりあそりあそりあそりあそりあそり

已未冬寫於
岐岨道中

榛岳



はるく二里をりるるぬふナツ修言くち戸地く
うれくまを風さのびくち吹あらくそびるま
わくまを雨雲東南よきあふちうさほこのたる
ぬ夕立ちをいづくし我ぐびやあぐまの兵衛にして
よきつれもつざらんぞかちりゆけいづくち海どちの
形どれく天地もくばくげのつちかふよのきくま
あふまをくち小若駄馬一丈つちと飛あぐまぬれ
くこのまを人さのら戸に居あぐまぬくまぬくま
あぐちうちうちふは何をきくむとあやとれく一扱
馬をいづくまをちかくかちりゆさぬあふあぐま
ていげやかち雨を盆をくむくかかちく地上ま
ちまら大河とわくまのくまむ事かこれく

一むしの伊勢系とすもまをくまをく鼻うこれぬくも
いとらばまぐまひめれたく風せぬ具足櫃つせ
ま駕れうちあ人くまもそのく後ゆけくちく
くくの田場を見あぐり五つげのりよちあぐり
泥まあまはありくまのむとり大音にちれまえく
解るにあびんたれまもく是をたれまつせま
不見いとくまのむけくまの其伝まもん捨のま
まま清がせれまねりせく十丁まをくゆけく雨ぐ
つちまはくまのまをくちかちら
まもちやたれひまうけ勢泥 鏝
かち吹上の墓よれま志くぬれまぬ女志
まごくはくかまきくまわりのまらまそまつが

ぬふらちよ肩おひせうふつらんのがあふくくと収
ぶ解まの妙子の母や程をくよれば女を飛らち
くよ後うぶよを屋うく女をくつれおひせく其次
身減くさめぬれがむさきくみ謝くともは吹上村
くいの見ふかしくとも立よを体てよやさくむのよ
やむらくれく其家よつれば家内一同は怪びあつて
七十解これ波女かけうふ茶碗をくくみたをこま
出せば八十げうそのぢく極うらと死ごさるむらうそ
むくは足を踏くはやましくらぬやなどくまど目そ
ハッち海母もた者ぬれが道のまきまはりのくやうく
よ辞して出ぬけ不足袋をむさくに名うふ家あつて二
足をうひゆく足よちくとも新くれば御免ゆくと

既陀袋よさくつれ五六丁のむさく家より糞
つけ馬てふりのく小附み豆腐を縄めく志がうたを
おいゆくつれ是つと眼さむふらうりつせくが世に
弘法芋といふありて石よなりたふ芋をわかれが是
まきまはく弘法豆腐とやつてまきまはくつひつ
箕田村の立場よりつれおちく渡邊源五綱が出
所ありと寶曆中み古の輩其功を銘く碑とて
是を見ふよ綱といふ字を綱といふたつれ解るに浅
ましくさく感慨あつぬと氣れ毒の涙をまげぬ
まると鳩の巢れ驛を越東村の茶店み舞くのもろ
時刻いつのほど間がハッちまき間もつれあつて
体くまといふはあつてせくあられとあつて

ハッ時あるべしやと聞かば七ッ時にいんけぬるまじしやと
れくきききききききききききききききききききききききき
中あふききききききききききききききききききききききき
ききききききききききききききききききききききききき
ききききききききききききききききききききききききき
詞子買詞邪子あききききききききききききききききききき
出まききききききききききききききききききききききき
名のききききききききききききききききききききききき
の扇の追風は戸のせききききききききききききききききき
ききききききききききききききききききききききききき
尊くかききききききききききききききききききききききき
記書世々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

いざいざいざいざいざいざいざいざいざいざいざいざいざいざ
を食れ死なんくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
とうめくくくく身よふきききききききききききききききき
ありに蛇蠅乃きききききききききききききききききききき
陽氏が見くく眼をや戸のききききききききききききききき
えきききききききききききききききききききききききき
小錢四文丹仙臺通寶の一文あきききききききききききき
延齡丹をききききききききききききききききききききき
よきききききききききききききききききききききききき
甚くききききききききききききききききききききききき
きききききききききききききききききききききききき
くとあきききききききききききききききききききききき

ふるにちのり浦和とくふりし一敷名中とて
ゆるむあまのま一を屋ぐとくゆぢれ多敷名不の
くれさくもものづげとて是を見りよ社友市川萬年
ぢれおのりぢされを都をゆきて四方山の家し
はくふる形一萬年をて後信陽に遊べふりし
紀り一本を出せると其地の名勝一も賦せざらぬ
中よ山行の佳作あり餘りて面をくれば予もほこ
韻を次く是誠和は

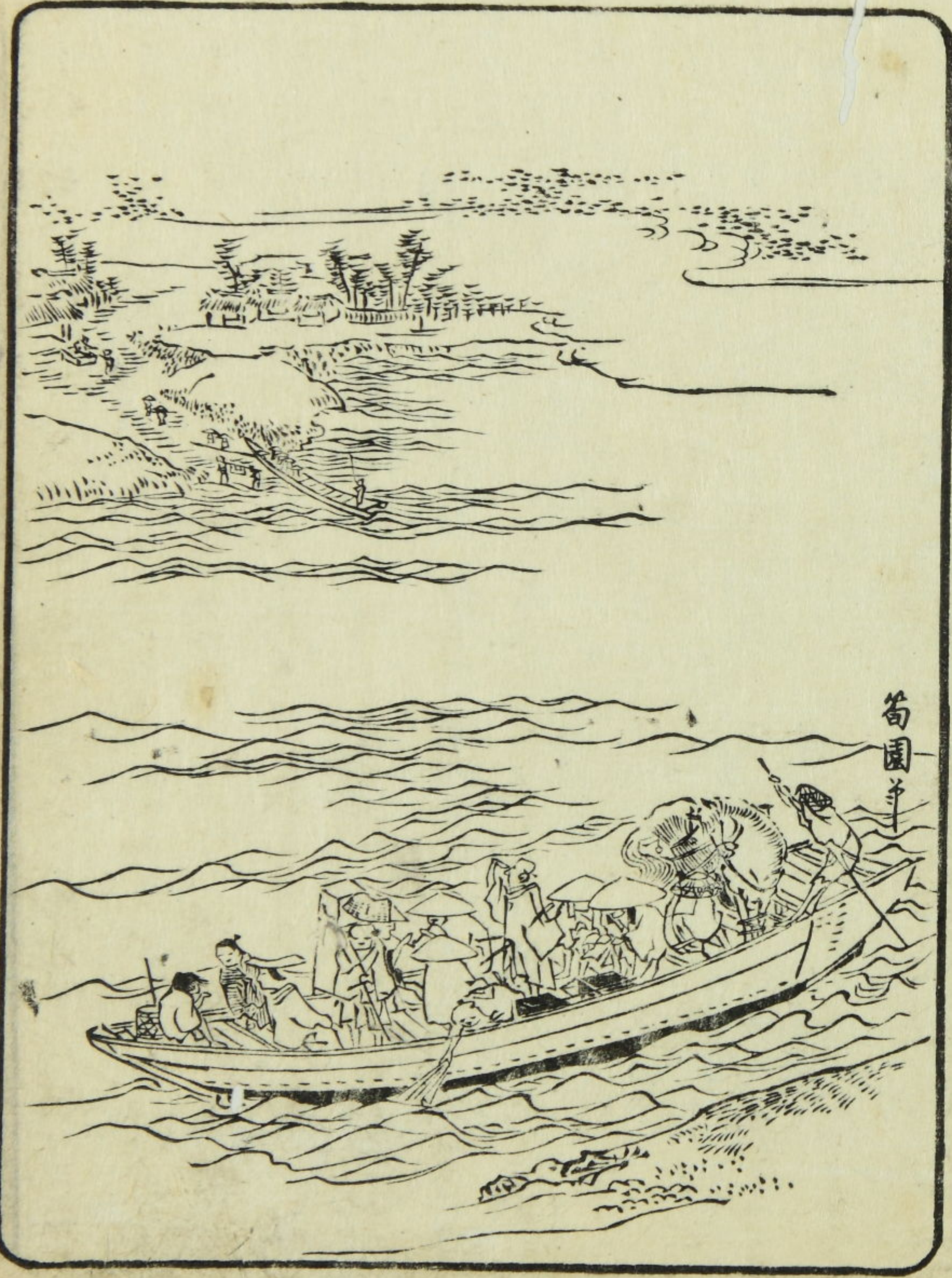
峻嶒^そ 浅嶽^{せん} 不堪攀^ま馬首^{ばしゅ} 炯嵐^{けう} 映客^{えい} 顔^{げん}
巒嶂^{らん} 萬尋^{まん} 臨曲^{りん} 水封^{すい} 疆千^{きやう} 載限^{ざい} 横關^{ごう}
曉天^{せう} 露衰^ろ 蒼苔^{そう} 淨晴^{じやう} 日雲^に 含玉^{くわん} 樹閑^{じゆ}
仗劍^{じやう} 深探^{しん} 幽境^{ゆう} 勝楓^{しやう} 林爲^{りん} 染信^{せん} 中山^{しやん}

雅談一夜あけびをまらび中五更よりつりてかしく枕
みよれがらうけに夢四隣にさくら

曉の時乃羽づれたるをてそのにられて夢をぬく

かくはびさつともにおれたる萬年ハ西一予ハ又東に
此うた根岸村過村をたえ焼茶坂を追風よりそ
船まづて巖を驛よりつれば胡麻揚氣氣とくゆり茶
釜ちりんとおどくたちよとわれをまらべ園子を五
ざし横りくらく涼しむらちをいそぐやあつべ
赤と午の貝あくら後あけをふしおふ湯代の戸田
川よりの川のおのそをこれが船むらひの岸より
あつて人をまらけら一もくおぬあべしとく
菓子うた店よあつてけくあつてくけあれるるを

ろれが奴の終成つるがて馬よ乗らるゝれれば三方荒神
 の所為よ西瓜二つ入らるゝれを信するゝの事ゝこ
 駕の中よと芋田樂こらるゝれれば暫女の茶屋こ
 軒端よ小便しゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 傍をけりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 近在の名よとも名よて年貢のとりたてつゝおぬか
 ぐゝ大根を信よおりせゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 吹れ清海空てふまのおゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 あれが圓けれ足狂貫がゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 さげゝ首よかきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 じゝけゝ山きゝ海をゝ青田遼渺やゝゝゝゝゝゝゝ
 人を怖れぬ茶屋ゝゝゝゝ乃銀を志あはれ毛



菑園

都より来たる者ありて一程なく板敷の宿に宿り
近きところありて此宿より一里許り家来つれり
きりぬらぬ酒賣り店の障子より湯吸物法取
ぶりぬらぬといふやせがちなことり松魚のつれを
おもひふれどぞや中々都を去る風情もああり
しももうのちあやうれものさくさくせいの雲集れり
顔のふれき粉あやうらうら流のごとくつれぬ赤
き襟をか合へりやうとよびけりぬらぬさすづれを乃
動くべきもあやうらぬ此宿より多くと大根種をひさ
六兵衛あやうせをさしぬらぬとみり一袋買ひぬら
たうしまたと四丁にやうりゆくやれり坂のとも

あやうらぬあやうらぬのちまたあやうらぬ一盃を
こみりぬらぬ板敷より一里許り家来つれり
つれぬらぬ酒賣り店の障子より湯吸物法取
ぶりぬらぬといふやせがちなことり松魚のつれを
おもひふれどぞや中々都を去る風情もああり
しももうのちあやうれものさくさくせいの雲集れり
顔のふれき粉あやうらうら流のごとくつれぬ赤
き襟をか合へりやうとよびけりぬらぬさすづれを乃
動くべきもあやうらぬ此宿より多くと大根種をひさ
六兵衛あやうせをさしぬらぬとみり一袋買ひぬら
たうしまたと四丁にやうりゆくやれり坂のとも

江月樓探題三十五首狂歌

立春 岩戸明し神代のまき荒れをゆくちのとも清ぬ新玉は春
 山霞 古き多かれ引よと松人もめ成きとくみふのこぎりの出嶽
 柳 糸配ふ似る折を後しとく浮世の莖を風ははらかん
 早蕨 け不姫の侍後う山乃脊をさるまをく一ッ巴子出たさわらひ
 花 てる人のみけゆく途へあまもく大妻れ死を吃とちりてれ
 時鳥 ねもつれもぢりうとくさる夏の空をうらにまきくやと交は
 五月雨 布引よあけはくたうる五月雨一とく度く度く滝津津
 夕立 夕立の山のせうあふ雨雲乃積雲とてきほふすししは
 荒和核 飛やくと海核やとく心素顔の名は流とる三輪を川浪
 七夕 多ねりしに侍子にあらたきとあまきたれは後る舟の帆のちりて
 月 吞はくせしと星うらら四斗擗れとめく近の月をこそみめ

雁 南嶽のこもみ入場をうらぬら只一折れ月よなくぬり
 擗衣 我も南のまきのまのこれお植は寝うとく秋の小萩中
 菊 させりの後入江巾ふとくせ秘蔵の菊に風をひくせし
 初冬 秋の目もつれ十月とけし坊さの川の回中かきとくちり
 雪 面ふし柳の一本ゆつとくと世間しとく雪乃 曙
 神楽 月さえとくあまきけのちもりくとかんし入るおの衣袂糸
 歳暮 くれてけ月日の駒お借残を小附あててもぢあを中とくた
 祈意 とう今の真ま神やいのとましと鶴さけくもとらんとて人の
 思 け糸のあらけ何とてけけりみつとくあお狗のうらとく
 残意 縫う身も意あを心ほにけうとくやとあんよむせうとくた
 別意 興つれとめる心は更よ途とく肌人の雪乃あまはれ
 忍意 ふら後あも志び目のまれね年月やあまをを畏る居て

ほごさむし山帯とら後子 止庵志多
春雨やうらうら五冊 有 辭 傳
けるさ先や 苦界 十年 狂 禪 豆
あむむりきけりとうきりぬ紙 鳶
龍賣名 夢まぬむらぬ二月うれ
うぐひまよほうとら後子の山
於意し山さうら戸の 明、ごうに
河の山と花たれ山亭かきみ、う南
初午やあさる 蛤 馬鹿 太 報
ふ酒の 狂女もあかり 籠まのり
土 手 永 和 九 子 子 とらとらごえ
藪りりや柳をみどら 帯ハ 袴子

後 夜 や 風 三 丈 とらとらみか
小 伎 を しとらえうらふ 雲雀、の ね
山 帯 ね や 壬 生 狂 言 乃 いとら 勢 色
田 楽 子 蝶 子 川 とら後や 遅 様

其

袋 瘦 志 とらとらとらとら 子規 給
あさきとらおりのうらとらとらとら 子規 紫
郭公 字 ハ 杜 鵑 号 ハ 子 規
ちん松魚 宇津の山色とらとらとら 子規
彩 彩 子 似 とらとら 鯉 魚 の 大 あとら 子規
かきとらとら 醋 子 涙 赤 とらとらとら 子規
時 焼 や 茄子 子 油 の 系 羽 掃

鬼十七
 題本李疑居
 島宿世中
 僧設月下
 過橋分野色
 移右處雲根
 贈去四遠未此
 迷期不負言
 要島

竹の子も肌ぬくさ落志あけさう南
 井乃子や墨田川子ハさ波より竹
 竹志子や親の心此木下園
 千町回え小町ハ寄く植仕翁
 辻妻や我身世々事糸五月雨
 分入ハ鬼も十七至合志花
 給志く蒲團着糸日や青阿く
 川志あれと蚊遣よさる木挽小屋
 傍の外多く月下の志 鶏批
 蚊屋賣と七尺志川志 紙帳賣
 水賣と奉家の河志とあさりけ
 傍輩とほつ川つたわらさ終るん

川輝や石斛生あお岩乃角
 竹婦人青糸志く之も雪の狐
 志素瓜く先陣おむる半
 涼くさや瓜と西瓜の丸裸
 志くさや軒志押乃青 簾
 一葉ち新好葉も志く涼舟

秋

押さ落くやわらとつらね志秋志風
 魂志水や三輪素顔く杉乃門
 盆棚やおあさくあく娘牛と馬
 草菴の志志や壁志穴目く
 大夢や志花も逸物あふ志く

名月やうのうののき 栲をり
 上をく眼めを態かーくあのみ
 里芋も親子たうひく月見哉
 月清くはる寝ぬ 鹿を耳よか
 月るや尾花う袖のそくく
 つもくあひく 茄子の籠いそくく
 茸持や峯よ文攀り家一ッ
 山姥のうくねくき木の子くれ
 毛氈の赤い目く丹楓持
 木啄も舌寝の耳く鶴哉
 たう矢右にうり山子か
 狗簾うくや菊の名よ人馬炉峯

細素
 見月

曾我 葉や縁さく天をいんか
 海の内く縁きう夜めれ初 茄子
 葉さげく暮る麦う里のやさくか
 本の子者ふ豆腐の身よ持衣う
 穰粟や葉けるちふ人名門
 菓子壺母青も馬毛あは秋さび
 け秋の南風や路中けく雪を
 ちく妹や破き障子の穴く
 冬
 栲の戸れ爰赤 嵐は晴雨くれ
 三両の質たくれく和く
 茶庵一盗人うりぬ小ねく

落葉してあふや隣ののち屋文
を川高や巨燵の山子かくまうん坊
まれば事おね風高し秋の雪
ふふ仙のふさふさのさむけの家
孝ふふさく疝氣のさりぐ夜窓うね
あふふさ茶碗をぬがね窓さか
う川とあふ瘦のつれふさむけの家
椽炭其こぼれもふさむけの家
堂守の我身おれも十夜うね
鬼よるも羊舌あふ紙衣か那
鮎鱧や高尾の果もおれりね
肴涇の考遊ありねぶ汁

蕎麥切の粒をのぐれく柚味噌か
煤掃や都段屋高し二五浦
寒念佛扇をく家のさむけの家
中舟一人娘の自惚やとととと
節季ゆや馬駄と草履ささづ
田作も田つらと穿たやささ市
兼の暮障子まののを書くぐら
おがつうね掛を拂ふの厄けし
久ぬとの胸けつえとととと
年静弓と臨引の暖けり

右の百白の先生と所の江を作る寝惚軒
哉とる京の自筆本をりお写年 月磨(あ)

○追加

俳諧賛物詞書類

曾我兄才對面の繪おげや〜の輕比奈さう
ゆゑ所

雨のせきをそとてはさるゝは梅はを死
何のの君乃海なれ死よめさねく〜らさて
死んねとぬら〜こぶら〜白ひあ〜
藪つゝ女の画よ

やぶつゝや互所を〜を春やあ〜
鳥居清長う景法空やあり志繪み

〜はつらん身い〜あみの空やあり
東道紀りの中に

山を outcome 江都事軍らとなくまに

夜半亭画多於桃青菊伊賀山越の圖や

籠を猿よら〜ね〜芭蕉付雨〜の南

信濃紀りの中に

著る妻の花問らん信法れよ〜新山

卒都婆小町志賛

世のさゆや尾無〜を〜も炭多け〜

茶暮老人よ代〜を作られ多教

年それと娘の路中 智年〜二歩

商人乃〜を〜を世をの〜れ〜於年尾〜

提灯此弓を代表〜大〜

事〜りたふ大三十日〜と〜りて

十をくつと蜜柑くひらきと大二十日
十をくつとぬ大晦日にとらりて

茶を夜や襦ろくふけれあはれ斗

あつさな腎虚くくおとすく中をほとけり多

保を密をくつとけり此黄丸

○くつをくつとくつと書林の雲もく假名詩韻礎と
くつを撰多ふ附くもいひくあつと作れりその

夏日舟行 七言絶句いきの韻

風いあぐく黒河のつとく船いほふく西河のはし

中よ翁子の袖をくくも西風くもにくつおふくくま

詠豆腐 七言律 ちけの韻

身の白豆の豆くつとけれるもそのふ妙が豆い及むぬ

湯どうぬを冬乃あつた田楽の春れゆふ屋
三つくの柳をそぐれつに偶を耳をきくく
く油揚とさほをくくも考をくくく事あれ

○狂詩 偶成

人間萬事蠻絲皮賢愚分量嘗不知
自賞天晴男一匹生涯如屁保無為

寄島屋主人

賃錢先拂君家事荷物往來紛失稀
但使證文成請負不教日限在相違

題藪人女画

風儀由來臭小便三平二満有誰憐
桐生八丈朝鮮櫛御禮奉公跡一年

過西町

年々西日驚明神折助元非參詣人
只是樗蒲今日興一時費隙給金身

題自墮落先生画像

先生永々浪人身火燒俳諧善動唇
我儘骨張江戸子元來不取御鬚塵

云追加之躰のくさくさ此又あつて梓ありたる以
らしは遊々か子不杉成とて人の口づつて傳つれ
しを其はくつて其の二子忠かつてえをまてり
く別はあつてよふつきもあつてさうあつてあつて
べくもあつてさうあつてあつてあつてあつて

瑞玉堂主人誌

金雞醫酒談

全一冊出來

古今青囊家の奇話を録して先生
葵嶮此事實をわけ奥に其人の大
藁野翁の良割を載り東天紅廬
隨筆の其一也

金雞雜記

三冊今在于刻

上卷は國朝勝國後の世語中卷は唐山
清和五代の異説下卷は外臺の妙法
を記す都く醫事に属するもの多し

金雞先生著 柳窓臥餘

二冊近刻

觀奕道人の筆記ありて國朝の
怪説狐貉等を漢文ありたり
はくもあつてあつて

關東畸人傳

五冊近刻

近世畸人傳ありて享保已来東よ
名ある奇人のり状をかき文字は
あつて諸名家の画を加ふ

狂歌闇雲愚抄

袖珍本出來

類聚の歌多き歌は八重橋山さうり
福ふふこれ福をよせく撞ふふあふ
秀作をわける所景物をこく
記はたし初心に益あり書なり

寛政 庚申 初夏 彫行

京都三條通富小路

須原屋平九衛門

大坂心齋橋北久太郎町

河内屋喜兵衛

尾張名護屋本町

風月孫助

江戸大傳馬町二丁目

須原屋安兵衛

呈上、中村俊定様宛

水谷屋主



下巻題字

くまがけぶんこ

尾巻

